

戦後50年・戦争体験手記

○あの日、あの時のことを…

中千島（松輪島）上陸作戦

奥村昌坪（本町2）



軍機が敵艦の警戒に近づくにつれて、我々船団は第一機動隊の歩兵第百五十八聯隊、上田聯隊長は軍旗を率いて、良洋丸に乗船。続く護衛艦「薄雲」、輸送船「明石丸」、第二機動隊「富国丸」「松仁丸」「護衛艦「八丈」各機動隊は、極寒の海を渡り、二月二十九日、目的地「松輪島」を目指し出港した。友軍機は暫く護衛していたが、その姿は消えていった。これを期に敵艦の警戒は激しく、将兵とも船酔いにも屈せず、兵長以上の対潜不寝番が船員と合体で編成、にもかかわらず、護衛艦や輸送船が雷撃を受け、敵艦の海底に消えていった。しかも百五十八聯隊主力の良洋丸が目的の松輪島を目前にして、激浪のため錨の片方が切断され座礁した。幸いにも我々が乗船した富国丸は敵艦に追跡されながらもオホーツク海に退避しながら、防衛隊「松輪島」に上陸して仕務に付いた。

【目的地・松輪島へ】
小樽港を出港したのは昭和十九年二月二十五日、それぞれ単船独航で集結地の大湊軍港に向かう。軍港には巡洋艦、駆逐艦、海防艦等が威容を誇り、厳寒の湾内に待機している。上空には友

【上陸初の日】
部隊が上陸して「ホット」した。三月十六日小隊長より軍旗衛兵に服務するよう命令を受ける。新発田出発以来、命令受領。列

【敵艦水艦の浮上】
十九年六月一日、小隊長より大和湾に行き、揚陸作業の命令を受け、自分ほか二名と出発し

奥村さんは昭和十五年十二月に金歩歩兵七十五連隊、第十一中隊に入隊。その後昭和十九年二月に中千島の松輪島へ向かい、本土防衛にあたりました。終戦後は四年間にわたりシベリアで抑留生活を送ったそうです。「戦争が終わったと聞いて、何とも言えぬ解放感に浸りました。極寒の中で過ごしたシベリアでの生活は本当に大変でした」と話しています。

車衛兵、今また軍旗衛兵司令となり、早速服務規則を調べ暗記し、立哨時間割作して任務に就く。軍旗衛兵は将校の出入りが激しく、その都度「搭乗」の敬礼、「立哨中異状ありません」の連続である。
松輪島にも夜が訪れ、将校の出入りも途絶え、騒々しさも消えたところ、記憶では八時過ぎだったと思う。上陸最初の空襲警し、行き交う将校の一人が「着剣は危険だからよし、立哨中の兵を残し、他は倉外に散開」と命令された。三、四分後米機特有の金環音が聞こえた。突如松輪島上陸に照明弾が炸裂、更に二、二分間をおいて敵艦落下され、松輪島、磐城島周回全体が青白い光に浮き出され、その光の中に伏せている将兵が映し出された。敵艦は爆弾を投下せず北方に去った。多分飛行写真を撮り、上陸作戦の準備だったのだろう。

松輪島地区守備の記録参照によれば、この敵艦による我が軍の被害は、六十三名中二百六十一名が戦死、火砲、弾薬、装備の一切を海没流失と記録されている。

て集合地に到着し、時間があつたので雑談をしていた。午前八時過ぎだったと思う。突如磐城島の良洋丸が傾いた。敵艦の魚雷攻撃だ。その日大和湾には三隻の輸送船が停泊していて、日振丸や紅海丸が物資を満載して揚陸を待っていた。ほかに空砲の岩木丸が停泊、突然雷撃を受け、紅海丸と岩木丸が轟音とともに忽ち沈没した。日振丸は沈没を防ぐため、全速で大和湾の岸辺に乗り揚げて座礁する。乗員部隊は海上に浮かぶ兵員、舟艇の救助に全力をあげていた。突然、眼前三百メートル付近に敵艦が浮上し、その時敵艦が天蓋を開け、甲板に立つた。我が軍も陸海軍を問わず敵艦に集中攻撃をかけた。敵兵も驚き、天蓋より艦内に逃げ入った。また友軍機もエンジンをつけ、攻撃態勢に入ったが、飛行場付近は濃霧に覆われて発進できなかった。敵艦は多数被弾したが、撃沈の確証はできなかった。我が軍の砲撃に際し、重砲、要塞砲は一発も発射されなかった。これは敵の上陸作戦に備え、砲の所在を秘匿したとのことである。

良洋丸と磐城島

東城時文（四街道市）



東城さんは昭和十八年九月、新発田歩兵第百五十八連隊に入隊。終戦後は国鉄職員として活躍され、昭和六十二年には北方領土の歴史や地理、戦時下の人間心理を著した「どうなる北方領土と千島戦後体験」を処女出版するなど、精力的に執筆活動を行っています。なお、現在東城さんは千葉県四街道市に在住です。

目的の地松輪島に上陸したのは、昭和十九年三月十五日の夕刻である。

予定より十日間遅れた訳である。写真の眼前に見える大きな輸送船良洋丸（五九七三）に乗船して、ここに到着したのは三月三日である。

戦争体験手記を読んでのご意見やご感想をお聞かせください。
・送付先：新津市企画調整課広報秘書係（☎956 新津市程島2009番地、☎24-2111内線331）へ。

猛烈な低気圧の襲来で、三〇日の強風と猛吹雪、波浪は六尺という悪天候のため、松輪島への上陸は不可能であった。一夜が明けた三月四日、強風波浪のため錨の片方が切断、船が移動し、船尾が岩礁に激突、機関室への浸水が始まった。いちかばちか。船長の勘でエンジンをつるフル回転させて、強行座礁を決定したのである。

船は沈没と転覆を免れたが、船体は約二十五度に傾斜した。二夜が明けた三月五日、猛吹雪と強風、六尺の波浪は続いていった。傾斜した甲板は波で洗われ、船体の半分は浸水していた。三月五日の昼、これが最後という時がやってきた。この波浪と強風では、何時沈没するか分からない。回光通信で、磐城島への通信が猛吹雪の中に始まった。「われ、飛び込み準備終われり」

全軍の兵士に伝えられた。勿論、全員戦死の覚悟をさせられたのである。回光通信で、事態の重大であることがわかった。

ることを知った磐城島では、数隻の大発決死隊を編成し、船に近付いてきた。まるで木の葉の様だったことを覚えている。本船に近付いても、波浪による上・下動のため、大発への乗船は困難を極めた。上・下動が六・七尺のため、脚骨折やねん坐の兵隊が続出した。

大発に飛び乗る順番がやってきた。大発は海の底から突然眼前に現われ、小さく消えてゆく。まるでサーカスの空中ブランコの様に恐怖におびえた一瞬であった。一回目は失敗、「早く飛び降りろ」の声で、目を皿の様にして大発の上でくぐるのを待った。僅か七、八秒位であったであろうか。波の底から大発が現われ、夢中で飛び降りた。三度位であったと思う。脚は少し衝撃を受けたが異常はなかった。輸送の第一回は第一五八連隊の軍旗と旗手、護衛兵の二名位、それと上田連隊長だった。連隊長は大発に飛び乗る際、脚を傷

て集合地に到着し、時間があつたので雑談をしていた。午前八時過ぎだったと思う。突如磐城島の良洋丸が傾いた。敵艦の魚雷攻撃だ。その日大和湾には三隻の輸送船が停泊していて、日振丸や紅海丸が物資を満載して揚陸を待っていた。ほかに空砲の岩木丸が停泊、突然雷撃を受け、紅海丸と岩木丸が轟音とともに忽ち沈没した。日振丸は沈没を防ぐため、全速で大和湾の岸辺に乗り揚げて座礁する。乗員部隊は海上に浮かぶ兵員、舟艇の救助に全力をあげていた。突然、眼前三百メートル付近に敵艦が浮上し、その時敵艦が天蓋を開け、甲板に立つた。我が軍も陸海軍を問わず敵艦に集中攻撃をかけた。敵兵も驚き、天蓋より艦内に逃げ入った。また友軍機もエンジンをつけ、攻撃態勢に入ったが、飛行場付近は濃霧に覆われて発進できなかった。敵艦は多数被弾したが、撃沈の確証はできなかった。我が軍の砲撃に際し、重砲、要塞砲は一発も発射されなかった。これは敵の上陸作戦に備え、砲の所在を秘匿したとのことである。

められた。
第二回目からは、兵隊連の乗船が始まり、磐城島への移送が完了したのは三月五日の夕刻であった。
猛烈な吹雪、風速三〇以上、波浪六、七尺は未だ続き、何時果てるとも分からなかった。磐城島へ上陸したわれわれは、食料等が全く無いことを聞かされた。
雪孔を掘って一ヶ分隊毎に暮らすことになった。だが、こんな生活が何時まで続くのだろうか。何と何度か思った。
「早く天候が回復して呉れないかなあ」
兵隊連はそれを願った。
腹が減れば雪を口にした。誰かがタバコを吸い始めた。一服、二服、三服。
「ほら、遅いみだぞ」
「ああ、んめ、ほん、んめ」
新潟県のアバラ骨が一本不足の連中だ。ここでも遠慮なく方言が飛び交った。
この悪天候は何と十日間も続いた。全くあきらめ果てたものである。
三月十五日は早朝から、北方では全く珍しい日本晴で、今日こそは対岸の松輪島へ行けると思った。
※東城さんの体験手記は、紙面の都合上一部のみ掲載します。

お買物、ご用命は市内で

お買物、ご用命は市内で



開放型ガスストーブをお使いの皆様へ

ガス使用中は必ず換気をしましょう

※器具の表示を確認してください。おとどけているガスは12A10,500キロカロリーです。

- ストーブを使用する場合は、1時間に1回1分程度の換気の目安です。また、ストーブの器具箱はいつも全開（2段階切替は全開または半開）でご使用ください。
- 器具に半開の表示がないストーブは、必ず全開でお使いください。

越後天然ガス株式会社

新津 24-2171 荻川 25-2100

寿司処 **華舞**

新津駅前通り
出前予約
☎23-5758

●華舞コース PM8:00まで
2,000円より

襖、壁、障子、天井、カーテン
ブラインド、カーペット、クッションフロアー
美術表装、額、掛軸

表具一心堂

本町3 ☎22-2035